

## 中井英夫『虚無への供物』

大洗藍司

三大奇書とも戦後三大推理小説とも呼ばれる、ミステリー最高傑作の一つ。「日本ミステリーの傑作を十冊挙げて」とミステリーファンに問うたとき、いろいろな人がさまざまに作品を選ぶだろうが、ほぼ全員に挙げられるのはこの作品くらいなものだろう。

両親を洞爺丸で亡くした氷室家の蒼司・紅司兄弟と、同じく洞爺丸で両親を亡くして氷室家に居候している従弟の藍司の三人を軸に、氷室家殺人事件の幕は切つて落とされる。色彩、宝石、薔薇や植物の色の話、アイヌ奇譚、五色不動尊と、物語はめくるめく進んでゆく。これほど「めくるめく」という言葉がピッタリくる小説も珍しい。北村薫は「こんなに面白い小説があったのかと感激しながら読んだ」と述べている。

主人公であり冴えない優柔不断な男性アリーシャ（日本人）、これに美貌のシャンソン歌手であり強引で臆することを知らない奈々、西洋かぶれで気障な老人藤木田が、当事者の一人藍司を巻き込んで推理合戦を行う。四者四様の頓珍漢な推理を行うから、面白くないはずがない。

この著者は『幻想博物館』等の幻想小説をよくする作家だけあって、物語に現実味は薄く、まるで異国の世界に迷い込んだかのように。そもそも出だしが満月の夜のゲイバアとくれば、現実感などあるはずがない。そう、本格推理には現実感など不要なのだ。

全四章のうち前半二章を、塔英夫名義で乱歩賞に応募している。このときの最終候補は『大いなる幻影』『華やかな死体』『陽気な容疑者たち』、そして本作である。あまりに充実した作品が競ったと後々の語りぐさとなっているこの回は前者二作の同時受賞となったが、江戸川乱歩は本作を大変気に入ったらしい。私は四作中で本作が断トツに面白と思う。

私が読んだのは一九七九年度版の講談社文庫（現在絶版）だが、出口裕也の解説もまた絶品。

そう、私の筆名「藍司」は、この小説から取っている。

〈出版〉講談社文庫（上下巻）

〈本文文字数〉七九六字

## 黒川博行『二度のお別れ』

大洗藍司

先に古典名作を挙げたので、次は比較的新しい作品を紹介しよう。

この作者、今はなきサントリーミステリー大賞の出身である。本作で第一回の佳作を、『雨に殺せば』で第二回の佳作を、とんで第四回に『キャッツアイ転がった』で見事大賞を受賞している。

銀行に強盗が押し入る。事業資金を借り入れに来ていた客が止めに入り、撃たれ、連れ去られる。しばらくして身代金の要求が入る。

銀行強盗から一転誘拐の捜査に当たるのは、大阪府警捜査一課<sup>たき</sup>強盗班に属する、ちよつと間の抜けた「黒マメコンビ」の刑事二人がこのお話の主人公である。

犯人の要求に従って金を持って行くが、歩き廻されたあげくに、犯人でない人間を捕まえてしまう。班の面目はまるつぶれ、犯人側に警察が介入していることも知られてしまう。それにしても相手側は、銀行強盗の犯人のくせに、なんと誘拐のうまいこと！

警察が介入しているかどうかを確かめるため、あちこち歩き廻らせるのは、ミステリーでは常套手段。介入の有無を見極めやすいようにどう歩かせるかが、作家としての腕の見せどころ。更には最大の難関、身代金受け渡しをどう処理するか。本書は、本当にお見事である。

デビュー作のため、今ほど筆の運びがなめらかではない。特にギャグなど若干すべりがち。でも内容はピカイチである。小説にせずに実行に移していれば、身代金はおそらく奪えたに相違ないと思わせる。作者は「誘拐するには」と本気で考えたに違いない。ぎりぎりまで考えたからこそ、ああいう結末になってしまったのだろう。この小説は、誘拐小説の白眉である。

この作者、今ではハードボイルドに転向してしまった。なんとも惜しい。もう本格物は書かないだろうから、既に書かれた数作を、味わいながら読むより他はない。

〈出版〉創元推理文庫

〈本文文字数〉七四九字

## パット・マガー 『探偵を捜せ』

大洗藍司

異色の推理作家である。通常は探偵が犯人を捜すが、パット・マガーは『被害者を捜せ』『探偵を捜せ』『目撃者を捜せ』のように、犯人でない人物を捜させる。『七人のおば』も被害者捜しだし、『四人の女』は被害者となるのは誰かという話。この趣向は難しかったのだろう、この五作以降は通常スタイルの推理小説に落ち着くが、評価は高くないらしい。翻訳もされていない。

この変わったスタイルの小説から、二作品を選んだ。今回は『探偵を捜せ』。

自分の容姿に絶対的な自信を持つ女の話である。美人でスタイル抜群の女優、けれど売れない。次善の策として年の離れた金持ちと結婚するが、すぐに夫は病気がちになり、田舎に移ってロッジを営む。夫の金を使って遊びまくるつもりだった彼女は、おおいに不満。そこで、薬と偽って毒薬を渡す。「君が僕を殺そうとしているのは判っている。あの薬は毒薬だろう？ 依頼した探偵がもうじき来る」

こう告げられた彼女は、おそらく教室にいられている女性陣が取るだろう行動と、同じ行動をとる。即ち、さっさと殺してしまった。

そして、追い返そうとしても帰らない客が来る。さてはこの人物が探偵か？ そしたらまた客が……。どうしても泊まると言い張る客が、都合四人。さて探偵は誰だ？ 虚々実々の駆け引きなのか、彼女の一人芝居なのか、調査を進めて探偵らしき人物を一人に絞る。そして彼女は、重大な決意をする。が……

この小説、純粹な本格ものとは言い難いが、真新しいユニークな視点と卓越したストーリーが冴えており、本格好きにも十分堪能できる作品になっている。

〈出版〉創元推理文庫

〈本文文字数〉六七三字